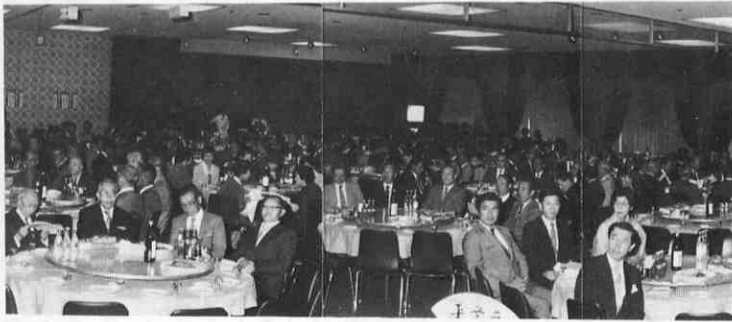


# くまざさ

第 9 号  
 発行 会  
 路 湖 陵 同 窓 会  
 刊 行 日  
 昭和 59 年 3 月 8 日  
 題 字  
 組 村 真 平 同 窓 会 会 長  
 印 刷 所  
 藤 田 印 刷 KK



昭和五十八年九月十七日(日)、本年度の湖陵同窓会総会並びに懇親会が、商工会館を会場として華々しく催された。今回は、母校開校七十周年の記念すべき年にあたり

## 昭和五十八年度湖陵同窓会総会 母校開校七十周年を祝して 七百余名の太集合

記念協賛会との合同祝賀懇親会の形をとつたので、参加者も、七百名を超える大集会となり、大変盛会であった。

沢田副幹事長の司会で、総会に入ったが、聖どおり、組村会長の挨拶、安井校長の祝辞など一連のセレモニーが終わり、先ほど市議会議長に就任した中村隆氏(釧中27期)が本会の議長として登壇。その名議長ぶりで一気に議事をすすめ無事終了した。

本年度の役員として、教職員湖陵会の人事との関連で、名倉副会長に替わり豊島副会長が就任したが、他は全員留任と決まった。(役員名簿、未尾記載)

終わりに、同窓会館建設に関して、建設小委員会の長であった久本副会長より経過報告がなされ、続いて、昨年八月に結成をみた建設実行委員会長の丹葉節郎氏から同館建設の資金集めについて、要請の挨拶があった。

引き続き、祝賀会に入ったが冒頭、母校吹奏楽部が校歌他三曲を演奏をして、幕あけとなった。

七十周年を記念してつくられた手ぬぐいを鉢巻きや肩かけとして各テーブルでは、たちまち歓談の輪がひろがり、そして、「銘酒、くまざさ」の美酒に酔い、熱気が会場一杯にみなぎった。

終盤、母校七十年の歴史にちなんで出席の七十才以上の同窓先輩に、当番幹事(女性)からカーネーションが贈られ、感動の拍手に満たされた。当番期の熱意ある運営により、すばらしい会であった。(徳)



### 役員名簿

顧問	丹葉 節郎 (釧 8)	米内 富久司 (釧 12)	古谷 武一 (釧 13)	坂下 忠勝 (釧 16)	米沢 悟空翁 (釧 17)	中村 隆 (釧 27)	組村 真平 (湖 1)	長内 宏 (湖 2)	豊島 弘道 (湖 5)	徳田 瑛子 (湖 5)	久本 甫 (湖 7)	神 峯躬 (湖 8)	遠藤 隆吉 (湖 4)	五十 風松夫 (湖 4)	中川 喜久雄 (湖 6)	沢田 征夫 (湖 13)	高島 正和 (湖 18)	見田 吉郎 (湖 12)	張江 幸正 (湖 16)	田中 章夫 (湖 18)	渡辺 敏昭 (湖 20)	和田 信幸 (湖 4)	高井 博司 (湖 6)	石井 東洋彦 (湖 11)	宮下 輝男 (湖 21)	矢野 幹男 (湖 3)	守谷 生弘 (湖 6)	山本 寿福 (湖 8)
会長	組村 真平 (湖 1)	副会長	長内 宏 (湖 2)	幹事長	遠藤 隆吉 (湖 4)	副幹事長	五十 風松夫 (湖 4)	會計長	見田 吉郎 (湖 12)	會計	張江 幸正 (湖 16)	書記	和田 信幸 (湖 4)	會計監査	矢野 幹男 (湖 3)	顧問	丹葉 節郎 (釧 8)											

# 今、ひとつに燃えて

## 向けて、募金、具体的にスタート

釧路・湖陵同窓会館における同窓会館建設に関する歴史的経緯については、すでに「くまざさ」の多くの号に載っているものであるが、会館建設の気運が一段と盛り上がり、具体的な募金活動が行なわれている現在、それらをまとめて、

さらに同窓の意気を高めることも大切と考え、重複する部分も取って無視して再掲することにした。

会館建設の源流は、昭和二十二年の「同窓会再建発起人会」である。そして、昭和三十四年の「同窓会」で

### 会館実現への航跡

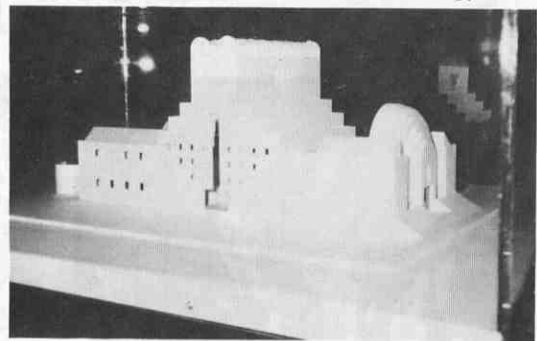
この計画は、五十八年八月二十七日の北海道新聞にも掲載され、この報道の直前の八月二十二日に「同窓会館建設実行委員会」の総会が開かれ、改めて、会館実現への意欲が揺ぎないことを確認し合ったのである。(北)

「湖陵ヶ丘に同窓会館を」と先輩達が発案されたのは、三十年以上も前のことであり、昭和五十年、北海道新聞社から「同窓会館用地に」と、湖陵グラウンドの隣接地三百坪の寄贈を受けて同窓の間に、にわかには具体性を帯びて論議され、昭和五十五年の秋には「開校七十周年記念として会館を建設しよう」ということになったのであります。ついで、建設小委員会が発足、論議、検討の末、別掲の設計図・模型写真の内容とし、実施設計を行う中で、記念講堂を核とし、同窓会資料室、同窓生談話室などを併設し、同窓の利用価値を考えた魅力ある会館にしようとする努力しているのであります。

### 湖陵同窓会館建設資金募集趣意書

湖陵同窓会館建設実行委員会

昨年の九月、開校七十周年記念式典で「近く会館一棟を建設の上、贈呈する」との目標を学校側に手渡し、最早、実行あるのみとの判断から建設実行委員会も正式に発足させたのであります。鉄筋造り三階建て、総面積約二百八十坪の会館建築資金予定、一億八千万円は同窓の善意による募金とし、一口一万円以上を目標に各期の委員が中心になって行うことにしたのであります。生存同窓生一万四千名中には少年戸もあり、収入相応に増額して協力をお願いすることにし、実際の募金は、学校改築とのからみ、道教委の建築許可、国税局の免税認可手続き完了後となりますが、その折は、同窓各位の絶大なるご協力、ご支援をよろしくお願い申し上げる次第であります。



同窓会館外観模型

### 設計者の横顔

私たちの手で建設しようとしている同窓会館の設計は、三十四年度卒業の毛綱一裕氏によるものである。

毛綱氏は昭和十六年十一月に釧路市に生まれ、日進小、東中、湖陵高校を経て、四十年に神戸大学工学部建築学科を卒業し、秀れた能力と将来を有望されて同学科の助手として奉職したが、五十一年に毛綱建築工房を設立して独立し翌年に大学を退官している。

一級建築士として国内はもとより、国際的に高く評価され、旧住



釧路市立博物館

# 同窓生の悲願

## 同窓会館建設に

**問**い 幹事長、このたびの同窓会館建設資金については、同窓からの募金によると決定したそうですが、その具体的な要領や今後の見通しについて、同窓会員の中にまだ、その趣旨を含め、理解の不十分な所があるようです。そこで募金要領、現在の状況、今後の見通しについて、詳しい内容を説明していただきたいのですが。

**答**え 同窓会館建設募金の趣意については別に載つたものでご理解いただくと、募金の状況ですが、現在、奉賛帳を各期代表に渡し、募金をお願いしているところですが、ただ、特定寄付金の認可が遅れておりますので現金によるのは釧中七期、釧中十六期の七十万円だけです。その他について各職場に電話照会したところ、二月末現在で約四千万円の募金申し込みがあります。各幹事さんの努力に負うところが多いのですが今後も会合を重ねて何とか目標額をめざして努力してほしいと思います。

**問**い 具体的な募金方法について、もう少し詳しくお願いします。

**答**え 目標額一千万円に対し七百万円を突破した期もあるのですが、原則として各期毎に目標を決めて、一口一万円以上を収入相応に増額してほしいと思います。同期会のない期は職場の募金帳へ記載していただきたいし、各職場での募金になる場合は募金額の基準を徹底させ

### 募金要領と中間展望

— 今後の見通しについて 遠藤幹事長に聞く —

その金額を各期ごとに記載してほしいと思います。

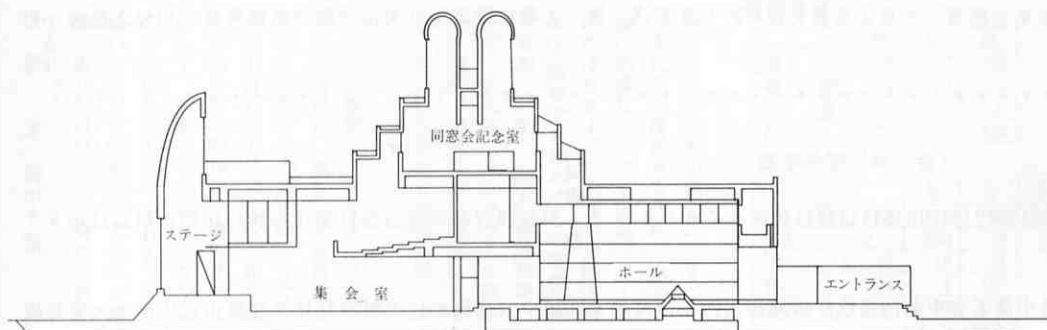
また、企業大口については、実行委の幹事が別途に行う予定でその金額については小船井氏と同窓会長とで相談中です。従って、該当企業の役員は個人としての金額を記載していただくこととなりますので、ご理解をいただきたい。

**問**い 納入方法について何か。

**答**え 学校改築と連動するため趣意書にあるとおり、諸手続きの終了後に現金を納入していただくことになり現在は募金帳に記載をしていただくだけで結構です。

実際納入は来春以降になりますし、その際には納入しやすいように、分割払いなどの方法も取り入れていきたいと考えています。現に、A期のB氏のように、五十八、五十九の両年の十二月に各二十五万円というような例もありますので同窓の悲願である会館実現のためによりしく願っています。

### 同窓会館設計図



釧路市湿原展望台

川邸、釧路市立博物館、釧路市湿原展望台、釧路市立東中学校と身近にその作品が見られる。

天紋、地紋、人紋の三相より成る宇宙的建築、もしくは建築的宇宙を想定し、技術的レベル・手法的レベルは現代建築の最高水準にあり、天地創造・宇宙発生のイメージを再現し、そのシステムは乾坤二元やセフィロートに依拠し、その構造原理は宇宙機構の一切であるといわれる。

毛綱氏は「私の建築物は、簡単な言葉で言えば、それは古代からのシンボリズムと現代技術の混合といつてよい」と述べている。

今後のますますの活躍を同窓生一同期待している。

(岩)

檄

母校に七〇年の歳月が流れこの丘に集り散するもの既に一万七千余名。或いは郷土の礎石となり或いは中央に雄飛して、住い・なりわいを異にするとも、共に過した青春時代の想い出は懐しく、その哀愴は共通である。

今、同窓会、後援会、PTA、一丸となり、七十年を記念して後進のため湖陵が丘に同窓会館を建設せんとす。時たま／＼母校も老朽化のため改築の気運にあり、この会館は必ずや新校舎の格調を高めるものと信ずる。諸賢、願わくば我らを育くんでくれた母校のため最大限の尽力あらんことを望むや切

同窓会顧問団

- 丹 葉 節 郎
- 米 内 富 久 司
- 古 谷 武 一
- 米 沢 悟 空 翁
- 坂 下 忠 隆
- 中 村

釧路湖陵同窓会館建設実行委員会名簿

理 事										副 会 長										顧 問												
釧路市職員湖陵会長	厚岸湖陵会幹事	十勝湖陵会幹事	札幌京釧路会幹事	在野湖陵会幹事	後援会副会長	P T A 副会長	副幹事	同窓会副会長	前同窓会副会長	同窓会副会長	釧路市法務士会	釧路市医師会	釧路市護士会	釧路市紙工会	十勝湖陵会	釧路市教職員湖陵会	三ツ輪運輸湖陵会	湖陵市役所湖陵会	厚岸湖陵会	札幌湖陵会	釧路市湖陵会	大栄グループ代表	P T A 代表	後援会	同窓会	道市議院議員	道市議院議員	道市議院議員	前道市議院議員	衆議院議員	衆議院議員	衆議院議員

波太男青佐坂村工割松妹佐小高沢中五神徳豊長名橋中野北中桂羽飴金河上波渡小伊山丹中坂古米梅綿滝池北  
多刀 十 船  
野野沢木川上上藤方原尾渡畑島田川嵐 田島内倉場村口野川木田 子崎岡岡辺井藤本葉村下谷内山淵貫沢端村

康 武和洋史寿祥久繼保龍正征喜松峯瑛弘 亮幸 昭邦忠行定養 敏政源武正 節 忠武富源俊健 清義  
久 次 久

実夫浩夫美治郎男一幸男正英和矢雄夫躬子道宏汎二雄一夫雄仁雄雄悦弘夫治司郎司将郎隆勝一司悦之輔勉一和  
理 事

湖 中 釧 路 湖 陵 同 窓 会 館 建 設 実 行 委 員 会 名 簿  
24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 20 19 18 17 16 15 15 14 13 11 10 9 7 期

佐楡種中高名吉中鈴門渡吹片浜関柳山浅本伊滝堀木高松中八徳両納佐水飯浪林姥高軽難山岩佐小山大鬼鈴磯  
々々 木金市川橋和井沢木 部越山木口 本川間藤沢越内間島村幡永谷谷藤口利岡田沢島部波崎堀間川本保武木部  
達 博義重祥 豊喜次明 義政 寿了秀文泰徳周英良 弥滋 喜達正 義久 耕晴良 氏令一 信徳正  
章朗司夫雄保朔隆治雄郎徳要雄司悟福一一雄男治治二治衛平男要治三司茂雄男均造夫一武隆次衛久博弘一巳

遠 高島 大 中石永武 今荒張柴白花多成寺金 日 平 沼大菊野中 渡 小伊  
藤 島本 道 谷井田藤 泉井江田木井湖田西野 向 川 崎林地村江 辺 甲藤  
幸 光 藤東淳 克有悌富精哲省竹章幸 正 剛 吉富常大孝 幸  
敏 優一 肇 和彦一忠 朗玄治也二雄三治夫平 雄 喜 麒一男六司 忠 一忠

# いっしょの活動をふりかえる

湖陵四期 和田 信 幸

同窓生のみなさま、いかがお過ごしですか。

八三年度は、九月の開校七十周年記念式典と、一月に行なわれた

全国高校スケート競技選手権大会の主管校を務める二大行事をかかえ、多忙を極めた一年でした(こ

れらの行事実施にあたり、同窓生の方々にも多大のご協力をいただきました。紙面をかりてお礼を申しあげます)。

時の流れるのは早いもので、今年も卒業式を迎える時期が到来しました。この「くまざさ」九号がみなさまのお手もとに届けられよ

頃には、湖陵第三十六回卒業式が行なわれ、開校以来一七、二〇〇余名の卒業生を送りだすことになりました。

この時期はまた、卒業生にとって明暗を分ける大学入試の合格発表が相次ぐ時期でもあります。進路指導部のまとめによりますと、

進路と進学希望状況は別表の通りです。進学についての今年の特徴は、国公立ばなれが目立った、早

大、慶大や上智大など有名私立校の合格が一層困難になる一方、従来すべり止めと考えていた私大も一、二ランク上った。各種・専修

学校が減少し、短大(特に医療技術系)が増加している、と分析しています。

就職関係では、二月未現在希望者二十九名中、十九名(一般企業

十七名、公務員二名)が内定、この中で行革のあおりもあって、公務員二次試験のむずかしさ(特に女子)が指摘されています。

二十六都道府県、二八九校、一五〇〇名をこえる参加者によって繰りひろげられた全国スケート大会の運営を、外部の関係者や本校教職員、生徒諸君の協力で無事終

えることができたことは先にも触れた通りですが、この地元開催の全国大会には、本校からアイスホッケー部とフィギュア(女子)が出場しました。

ご存知の通り、二度にわたる全国制覇の輝かしい実績をもつホッケー部は、十分に実力を出しきれずに敗れ、来年に望みをつなぐことになりました。フィギュアに出場した中村美保さん(三年)は、地道な努力が実ってBグループで見事優勝、地元の人々を喜ばせました。

教育大に進学後も精進を続けると

ります。

## 進路希望

	男	女	計
進学	269	127	396
就職	10	19	29
自営	0	1	1
計	379	147	426

## 進学希望(延べ数)

	男	女	計	昨年
国立	143	42	185	205
私立	350	78	428	421
国立短	18	21	39	18
私立短	4	107	111	87
専大・各種専修	14	37	51	64
1人 2.1校受験				

いうことで将来が楽しみます。

文化系、運動系を含め、全道大会に出場したクラブは延べ二十八のほりです。このうち全国大会には、前号でお知らせした将棋(橋下清志、一年)、陸上(菊地章泰、二年)に続き、ハンドボール部が三年連続、四度目の全国選抜大会(三月、名古屋市)出場を果しました。

以上大雑把に八三年をふり返ってきましたが、厳しい受験戦線と長びく不況下での就職難の中で、卒業生はもとより、在校生諸君にも周囲からの期待が一層深まっています。青春を十分楽しみながらこの期待にこたえてくれることを願い、そして同窓生の方々のご健勝を祈り、母校からの報告を終わ

道 / 東 / の / 印 / 刷 / セ / ン / タ / ー



# 藤田印刷株式会社

〒085 釧路市若草町3番地1 ☎22-4165・23-7411





# 「不惑」となりし

## 思い出と

釧中二十七日 伊藤 正 司

「青春」それは古今東西を問わず何時の時代にも問い続けられてきた人生の命題である。それは問わなければならないからである。青春は内包しているからであろう。青春それはまた人間が最も失いたくないものの一つでもある。然し時は容赦なくそれを奪い去って思い出のひと齣にしてしまう。残念ではあるが受け容れるより仕様がなない。唯一それは美化されるという方便に慰めを覚えることができるのがせめてもの取り得であろうか。青春論を語るのがこの稿の主旨ではない。湖陵高校同窓会報「くまざさ」への寄稿ということになればそれはお前の湖陵の青春を語れということであろう。

昭和十四年—昭和十九年、といえども半世紀近い時が流れ去ってしまった。我々二十七年は今年卒業四十周年を迎えているのである。その青春をふり返れば時はまさに国を挙げての戦争の真っ只中である。而して学び舎は巻脚絆(ゲートル)にリュックサックというムンムンたる男社会のまっ只中でもある。然しそんな中

で重苦しい時代背景を背に負い肩に担い乍らもあくなき知の希求にひたむきに突き進んだあの日々はやはり若きよき時代であったと思う。今に尚固い友情をつなぎ得る友を得たのもあの日々であり、容赦なく鉄拳のどぶ先輩が伝統を伝え、放課後の課外講義に教室を溢れさせて熱弁をふるう教師があり、「熱血燃ゆる若人の、正義の技をいざ示せ」と壮行の歌が流れ「力と正義と俺達と、三つは湖陵の花だもの、真紅の旗は伊達じゃない」と応援歌に男心の大風が吹きすさんだのもかけがえのない我が青春の悔いなき一頁であったことは間違いない。

湖陵に永し三十年と唱った母校は七十年の歴史を刻む現在である。一万七千の湖陵人脈の一人として苦しい甘い思いを噛みしめながら、あの日々を悔いありや、なしや、となつかしく脳裡に画く我れの今日を青春美化の方便に慰めを覚える年代と呼んで欲しくないと思ふのはやはり欲ばりであろうか。



# 「御同輩、今でもまだ

## 夢をみておいでか？」

湖陵十八期 古谷 広史

# わが青春は…

先日、何年ぶりかで母校へ行きまして。教育関係の仕事をしてるので、用事があっていったのですが、校舎が僕が在学したころと少しも変わっていないのには、いささか驚いてしまいました。あまりのなつかしさにしばらく校舎の中をうろろろしてました。いろんなことが思い出されました。

入学したときの晴れがましいようなてれくさいような気分、彼女にみつめられると身体がかたくなってしまうって顔を上げることができなかつたあこがれの人の、三年の後期までは坊主頭を、カッコ悪いなと思いつつも、よく行ったフォークダンスパーティ。血わき肉おどつた高体連の応援、他のクラスのよりは少しおどりのした我クラスのあんどん、ガリ勉とうしろ指をさされながらもかよつた図書館。始めてデートを体験した修学旅行などなど。次から次へと総体としては楽しかった我が青春時代を思い出しました。不思議なことに、つらかったこと、苦しかったこと、悩んだことなどはきれいに忘れていました。思い出とは、そういったものなのでしょう。過去をふり返って思い出に酔う年では、まだないのですが、廊下ですれちがった何人かの後輩へ（彼及び彼女らは、僕の在学当時に較べると、いくらか大人びているようにみえましたが）達をみたとき、つくづく我が青春時代も、はや遠くなりいき、といった感慨を持ちました。

もちろん彼らも、かつての僕のように悩み多き、多感な青春を、今まさに生きているのでありましよう。そういえば、僕の湖陵時代の友人達は、今どんな風生きていられるでしょう。彼らに逢うことができたなら聞いてみたいと思いませんか？ 帰りの車の中で、僕はいまだにこれだけはおぼえていた応援歌を口ずさんでいました。

「阿寒のお山のあさみどり、今は男のこむらさき」

御卒業・御入学の  
晴れの日を  
歴史の1ページに…

釧路市幣舞町2番2号

# 株式会社 吉井写真館

代表取締役 吉井 祥 朔 (湖陵18期)

電話 41-4798番



釧中32期

奥田達也

「校歌誕生」

昭和二年に三代目釧中校長として昇任早々の平沢虎一は「誠愛勇」の校訓を制定した。

ついで、湖陵健児の士気を鼓舞する校歌の制定を急いだ。

さきに先代の阿部校長は、作歌の権威者、土井晩翠に依頼するつもりであり、校風の特徴と郷土の風光を織り込んでこそ校歌の意義がある、と米釧を考えていたため時を逸してしまっている。

大正八年開校の庁立高女は、翌年すでに鈴木正雄初代校長作詞、東京音楽学校教授岡野貞一作曲による校歌「太平洋にのぼる日の……」を作り、女学生らはそれを誇りとして寄宿舎に、街にそのメロディーは流れていた。

平沢校長は昭和三年に国漢教諭菅原覚也を校歌選定委員に任命し在校生から歌詞を募ったのである。応募した生徒約三十名。同窓生からも寄せられて全部で五百余編だが内容は、菅原覚也の遺稿に

「釧路港の出船入り船をスケッチした民謡調のもの、意気は賞すべくも作詞たらず、というわけで、文芸部長であった私が作詞をすすめられ、起稿して高野辰之博士に

美人教師指導に歓声

菅原覚也の作詞による

校閲を乞い、ドイツから帰朝したばかりの信時潔先生に作曲を求めて、出来上がったのが昭和三年の春であった。これが私が作ったというよりも、雄大な郷土の景観と夢多き若人のいのちの中から生まれるべくして生まれた詩である」

高野は四節の原案を添削して三節にすべきといひ、菅原もこれに従って出来たのが、今なお湖陵高でも歌われる釧中校歌である。当時、日本の校歌は、多くが山田耕作らベテランによって作られており、事実、釧中也耕作に依頼

した。ところが、余り数多くの校歌を手がけたので、特徴が出ない。その耕作の推薦を受けたのが、新進作曲家、東京音楽学校教授の信時潔であり、平沢校長の旧知であったわけである。

今こそ有名だが、当時は余り知られておらず、校歌の作曲も、釧中が早い方であった。

さて、作曲された楽譜が釧中に着いたものの、音符に自信のある教師がいな。やむなく庁立高女の音楽教師・上野音楽学校卒の秀

才伊東わかに依頼する。が、のちに釧中四回生五味与一夫人となる伊東わか、そのとき着任したばかりで、男ばかりの釧中などへ、とても歌曲指導に行けない。

そこへ四年さきに赴任していた同校の体操教師、当時からモダンといわれかつ達な佐々木梅子が助太刀に現われてくれた。

「美人の若い教師が本校へくる」として釧中生徒は大騒ぎ。校舎の窓という窓から、いま現われるか今くるか、と全生徒が首を長くして待ち構える。そこに颯爽とあらわ

れた両女教師。当時は全く珍らしい洋装の伊東わか、佐々木梅子である。全生徒は歓声を挙げた。全く期待どおり。いや、それは想像以上のデビューであった。

その生徒の騒ぎを静めるのに釧中教師は一生懸命にならざるを得ない。嫌がる伊東先生に、無理に頼んで歌曲指導に来て貰った。万が一でも失礼があつては釧中の名折れ、二度とお願いは出来ない。

校歌が誕生、歌われるか、歌われないか、の瀬戸際である。屋内体育場に、ようやく全校生徒を並べたものの、壇上にあがった伊東わか、佐々木梅子両美人教諭に見とれる生徒たち、はたして大人しく、真面目に、自分達の校歌を覚えてくれるものかどうか。

村田（のち三原）正二ら教諭は壇を背にして、生徒の監視に真剣である。

「壇の上、まして女教師の顔など全く見ることは出来ない。生徒の方ばかり、凝視していた」と三原正二教諭はのちに梅子夫人に語る。かくて校歌の指導は行われ、生徒に歌われるようになった。

時あたかも、永久橋としての四代目幣舞橋が完成、十一月三日の開通式に間に合い、その重厚な韻律は全校生徒によって釧路川に鳴り響いたのであった。

御卒業・御入学の喜びを1枚の写真に……

湖陵・江南・北陽・星園・短大高校他  
市内小中学校卒業アルバム専属作成

株式会社 工藤写真館

工藤寿男(釧中26期)

釧路市南大通5-3-7 TEL 41-5751

駐車場(20台収容)完備

# 十勝同窓

## ユニークな交礼会

去る二月十九日(日)、帯広市の東急インで、十勝同窓の総会と交礼会が開催された。同窓会本部からは組村会長とともに招かれて同席する機会を得た。母校恩師の男沢先生、「くまざさ」に連載の青春譜湖陵ヶ丘の筆者である奥田達也氏ともども、大変楽しく過ごさせていただきました。

今日で二十二回目を迎えるという伝統のある会合で、その持ち方のユニークさに感心させられた。横一文字にみるとおり、釧中、釧女、湖陵、江南と、二校の同窓



生による合同の集いなのである。かつて果たせなかった夢を今一度という訳ではないが、多少面映い光景ではある。当然、懇談会前の総会は、それぞれ別室で開き、時を同じく一堂に会する呼吸は、これまた伝統のなせる技か、寸分のずれもなく開会したにはおどかさされた。

河崎会長のあいさつや、男沢先生の変らぬ話ぶりでスタートし、竹島俊夫幹事の軽妙な司会進行でスピーチあり、歌ありでにぎやかに展開した。特に、釧中、釧女、湖陵、江南の同じ卒業時期の仲間達と一緒にステージが上がって、

当時の想い出を語る趣向は、なかなか味のあるものであった。二次会に流れ、ますます盛り上がったところで、帰釧の時刻となつてしまつたが、同期に会い、教え子にも久しぶりに会うなど、大変良い経験をした。「十勝同窓会誌」を発行するなど、役員を中心に活発でユニークな活動をしている。会のますますの発展を願う次第である。(豊)

# 昭和五十九年～六〇年度役員名簿

会 長	河崎 弘(湖1)	幹 事	池田 隆(湖14)
副 会 長	長谷川 敏(湖4)		佐藤 文俊(湖17)
幹 事 長	男 沢 浩(湖4)		土谷富士夫(湖17)
	林 礼子(湖5)	会 計 監 事	吉川 宏(湖4)
	金沢 幹士(湖8)	監 事	大谷 勉(湖9)
	竹島 俊夫(湖10)		

## 第四回同窓会主催記念講演会

道新旭川支社編集局長 田畑 允氏(湖陵一期)

恒例となつた同窓会主催による一年生を対象とした講演会が、十一月三十日、釧路市公民館ホールで開催された。

今年で四回目を迎える同講演会

は、北海道新聞旭川支社編集局長田畑允氏(湖陵一期)が講師として、「青春を語る」と題して、約一時間におたり、戦後の物のなかつた時代の湖陵生としての生活から始まり、高校時代の勉強が如何に一人の人間の一生にとって大きな意味を持つかといった事柄をおよそ次のように、在校生四百五十人に対し熱っぽく語り掛けた。

戦後間もない時代に湖陵生達は厳寒期にも、粗末な服と、素足に朴歯を引っ掛けて登校した。それでも皆新しい時代の息吹を吸って、意気軒昂であつたこと。

新開部を創設し、夜遅くまで、騰写版原紙に向つて、新聞作りをしたこと。その「湖陵タイムス」が現在でも在校生に立派に受けつがれていること。

社会に出て、郷土史に興味を持ち、釧路叢書発刊のきっかけを作つたが、その時古文書が読めず、高校時代に古典の勉強をもつとしておけば良かったと感じたこと。

また仕事上外国へ行くことが多いが語学力の不足から、自分の伝えたい事柄を相手に伝え得ないがゆさを痛感し、高校時代の勉強不足を思つたこと。

生徒諸君には、より素晴らしい社会が待ち受けているのだから、先輩のつづを踏まないよう。一生懸命、今の時を大事に努力し、立派な自己を築いてほしい。という

中 川 邦雄 徳田 広  
遠藤 留吉 豊島 弘享  
北明 正紘 岩本 聖司

# あとがき

暦の上では立春も過ぎ、もうそろそろ春めく季節なのに、今冬は特別寒気のきびしい年のようである。そのせいか、幣舞橋からみる河面には、めずらしくハスの葉状の氷が浮かび、一層きびしさを感じさせられる。考えてみると、湖陵に通つていた頃には、よく見られた風景なのであつた。

母校改革に関して、敷地の広さが不足であるという問題がクローズアップしてきている。湖陵ヶ丘に風ありて—とつたい果立つた同窓のひとりとして、大変気になることである。母校改革と同窓会館建設は運動していることだけに心配な問題である。

三月は学窓を果立つ季節、今春、湖陵を卒業する生徒は四百二十六名とのこと。従つて、わが同窓の仲間は、総数で一万七千二百二名になる。卒業生諸君の前途に栄光あらんことを祈る。(豊)

## 編集にたずさわつた人

- 中川 邦雄 徳田 広
- 遠藤 留吉 豊島 弘享
- 北明 正紘 岩本 聖司